

文化遺産ニュース

Cultural Heritage News
from NARA

Vol.

31

March 2019

- | | |
|---|-----|
| ◎ 個別テーマ研修(アフガニスタン・バングラデシュ・パキスタン) | 1 |
| ◎ 文化遺産 ワークショップ(フィジー) | 2 |
| ◎ 集団研修 | 3 |
| ◎ 国際会議「町並み保存と地域連携」 | 4 |
| ◎ UNESCOバンコク事務所の文化遺産専門家会議(中国・南京)と
WHITRAPの文化遺産専門家会議(中国・蘇州) | 5 |
| ◎ 世界遺産教室 | 5/6 |
| ◎ 文化遺産セミナー「世界遺産「古都奈良の文化財」を考える」 | 6 |
| セブセブ(Sevusevu)の儀式 と カヴァ(Kava) | 裏表紙 |



個別テーマ 研修

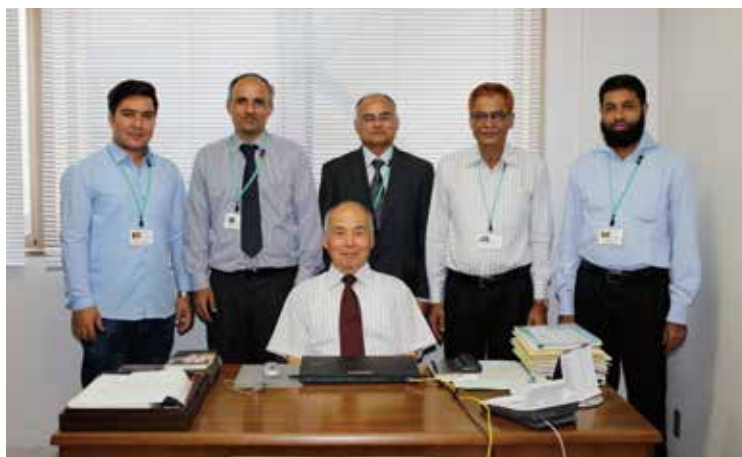
2018年7月24日から8月7日まで、アフガニスタン・バングラデシュ・パキスタンの国立博物館から5名の研修生を招き、「博物館収蔵品の保存科学」をテーマに実施しました。



蛍光X線分析装置の使用実習(奈良文化財研究所)



木製品の保存修復実習(奈良文化財研究所)



ACCU奈良事務所にて西村所長と

博物館収蔵品に関する研修は、2015年から毎年実施しており、今回が4回目です。これまでに、南アジアの3カ国（ネパール・スリランカ・モルジブ）、東南アジアの3カ国（カンボジア・ラオス・ミャンマー）、太平洋地域の3カ国（フィジー・バプアニューギニア・ソロモン諸島）が参加しています。

具体的な研修プログラムは、参加者の要望に沿って構成しますが、今回は科学的な調査方法に重点をおいて、展示環境の管理方法と保存修復の技術をあわせて学ぶ内容構成になりました。

なかでもアフガニスタン・パキスタンの国立博物館では、近々、蛍光X線によ

る分析装置を導入する計画があるようで、準備が必要とのことでした。そこで、奈良文化財研究所の保存修復科学研究室に出向き、機器の使用方法やデータ分析の留意点などについて、多くの実習を交えながら、一週間かけてじっくりと基礎を学びました。

また合間を縫って、元興寺文化財研究所や、キトラ古墳壁画保存管理施設など近隣の関係機関を訪れました。各種の保存修復ラボを視察しながら、多くの研究者の皆さんと意見交換する絶好の機会になりました。

奈良での経験が、一つでも二つでも、自国の仕事に役立てば幸いです。

研修生からのメッセージ



ハニフィさん
(アフガニスタン)

国立博物館所蔵品の70%が盗難や破壊に遭った。いまだ展示や保管の環境も悪いままである。保存科学についての経験は長くはないが、研修で得た知識や考えを、職場のみんなに伝えたい。



アリさん
(バングラデシュ)

保存科学の担当で、ACCU研修に参加したのは、私たち（同僚のホセインさん）も一緒に参加はじめてだ。自国では科学的な処理が中心なので、展示環境改善の取り組みは新鮮で有益だと感じた。



サイドさん
(パキスタン)

保存科学をテーマに、近隣の国々の研修生同士で意見交換しながら、新知識を共有できたことは大変有益だった。自国の国立博物館ではこの分野の部署で充実計画があるが、成果を反映させたい。

カリキュラム(概要)

講義
「博物館収蔵品の保存と展示の環境」

実習

「蛍光X線分析装置など分析機器の使用方法とデータの解釈」「展示環境(温湿度)の管理法」
「木製品の保存修復」

臨地研修

(奈良県)奈良文化財研究所と平城宮跡資料館平城宮跡歴史公園と平城宮いざない館飛鳥資料館キトラ古墳壁画保存管理施設・元興寺文化財研究所

報告・討議

研修生各国の「博物館の実情と課題」についての報告と意見交換



開講式／参加者の皆さん(フィジー博物館)

文化遺産 ワークショップ

2018年10月22日から27日まで、
フィジー共和国で実施しました。



写真撮影台の仮設実習(公務省研修啓発センター)

海外の現地で行うワークショップは今回で12回目ですが、はじめて大洋州の地域で開催することができました。共催者は首都スバにあるフィジー博物館。研修テーマは「博物館収蔵品の記録法(実測・拓本・写真)」です。収蔵品台帳が完備されていないという事情を背景にしたテーマ設定でした。研修には、フィジー国内の博物館や文化遺産保護を担当する関係機関から学芸員・調査員など14名が、またフィジー博物館の呼びかけでトンガの国立博物館からも1名が、参加しました。博物館で行った開講式は、大村昌弘・在フィジー日本国大使の列席のもと、歓迎儀式「セブセブ」ではじまる、フィジーの伝統色豊かなものでした。その後、公務省研修啓発センターに会場を移して、いよいよ研修開始です。



土器実測実習(公務省研修啓発センター)

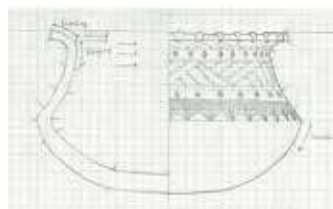
プログラム前半は、実測と拓本の実習で、東京文化財研究所の石村智さんが講師です。実演を交えた指導を受けながら、各自、博物館所蔵のラピタ土器(*)を教材にして、台帳の完成を目指します。ですが、参加者の多くは、キャリアパーや真弧(形取りの器具)といった実測道具を、はじめて手にします。拓本のタンプ作りも、はじめての体験でした。その上、細かな作業の連続で、集中力も途切れがちです。それでも、手順を繰り返し確認しながらの実習の甲斐あって、上々の作品に仕上げることができました。後半は、奈良文化財研究所の中村二郎さんを講師に迎え、写真撮影の実習です。ところが、絞りとシャッタースピード

講義
「文化財記録と台帳の作成」
「文化財写真撮影の基礎知識」

実習
「博物館収蔵文化財の記録法Ⅰ(実測)・Ⅱ(拓本)・Ⅲ(写真)」
「写真撮影台の仮設」
「収蔵文化財台帳の作成」

カリキュラム

*ラピタ文化 約三三〇〇年前にメラネシアで生まれた土器文化。土器は「ニューカレドニアのラピタ遺跡」にちなんでラピタ土器と呼ばれている。



の関係や被写界深度など、カメラの機能について、皆さん、よく知らないといえます。そこでもまず、カメラ操作の基礎知識をじっくりと学習し、その後、現地調達できる材料で撮影台を仮設して、撮影に臨むことにしました。照明の工夫ひとつで、被写体の質感や立体感が変わることなど、実感し納得しながらの熱心な実習ができました。最後に、実測図・拓本・写真を添付し、必要事項を記入して、台帳完成です。手間はかかりますが、フィジーを決める参考になればと思います。なお、ワークショップ開催は、地元フィジーのTVニュースや新聞でも報じられ、関心の高さを感じました。

集団研修

2018年9月4日から10月4日まで、アジア太平洋地域の16か国から16名の研修生を招き、「考古遺跡の調査と保存活用」をテーマに実施しました。



臨地研修(平城京左京三条二坊宮跡庭園)

ACCU奈良事務所が行う人材養成の中核事業が集団研修です。「考古遺跡」と「木造建造物」の2種類の研修テーマを、隔年で交互に実施しています。昨2018年は考古遺跡の年でした。

16名の研修生は、政府機関・博物館・研究所などで、自国の文化財保護に携わる若者たち(平均年齢31.7歳)です。キリバスから初の参加者を迎えました。

この研修の特色は、自身の手を動かす実習と、実際の現場に足を運ぶ臨地研修に多くの時間を充てる一方、講師と参加者間あるいは参加者相互間での議論が深まるように、意見交換主体のプログラムも数多く取り入れていることです。今回も、研修の共催機関であるイタコム(文化財保存修復研究国際センター)



臨地研修(大安寺塔院跡)

／本部ロームから講師を招き、たくさん議論を交わしました。同時に、文化遺産保護について最新の国際動向を知る絶好の機会にもなりました。

期間中には、国際博物館会議(ICOM)の舞鶴ミーティングに参加する機会にも恵まれました。京都大会2019のプレミーティングでしたが、フィジーからの研修生が事例報告を行い、会議参加者一同で意見交換するなど、貴重な経験をする事ができました。

ところで、今回の研修は、期間中に三回も台風に襲われました。9月4日の開講式当日には、21号が関西空港を冠水させ、連絡橋も不通の事態に陥りました。再開された空港から、皆さん予定どおり帰国できたこと、格別の感ありでした。



写真撮影実習(奈良文化財研究所)



土器実測実習(奈良市埋蔵文化財調査センター)

参加国

アフガニスタン・ブータン・カンボジア・中国・フィジー・インド・インドネシア・カザフスタン・キリバス・ラオス・モルデブ・ニューゼaland・パプアニューギニア・スリランカ・ウズベキスタン・ベトナム

カリキュラム(概要)

講義

「遺跡保護の国際動向」「日本の文化財保護制度と埋蔵文化財保護行政」「日本における遺跡の保存活用」「遺跡の発掘調査方法」「遺物の整理手順」「遺物の記録法」「遺跡の保存科学」文化財保護と地域連携」など

実習

「遺物の記録法(実測・拓本写真)」「木製品の保存修復」など

臨地研修

(奈良県)東大寺・大安寺・平城宮跡歴史公園と平城宮いざない館奈良文化財研究所と平城宮跡資料館・平城京左京三条二坊宮跡庭園奈良市埋蔵文化財調査センター・馬見丘陵公園キトラ古墳壁画保存管理施設 など
(京都府)長岡宮跡・平等院庭園
(大阪府)国立民族学博物館
(兵庫県)兵庫県立考古博物館

報告・討議

研修生各国の「遺跡保存活用の実情と課題」についての報告と意見交換
国際博物館会議(ICOM)舞鶴ミーティングでの事例報告と意見交換



事例報告の様子

国際会議

2018年11月21日から27日まで、文化遺産保護に携わるアジア太平洋地域の実務担当者が奈良に集まり、「町並み保存と地域連携」をテーマに議論を交わしました。



木曾平沢の住民の皆さんと

ACCUN奈良事務所では、過去2か年にわたり、研修参加者の中から、現在各国で文化遺産保護の指導的な地位で活躍中の代表者を再び招いて、今後の国際協力事業のあり方について意見交換してきました。議論の中で、多くの皆さんが要望のひとつに挙げたものに、文化遺産の保存と地域社会の関わりについて考える会議・研修の開催がありました。

そこで、日本で一定の蓄積がある町並み保存の分野について、地域連携の側面から考える会議を企画しました。

初日は、日本人講師お三方の基調講演です。下間久美子さん（文化庁）の「日本における町並み保存の現状と課題について」、清水重敦さん（京都工芸繊維大学）の「日本の町並み保存の実例」、西山徳明さん（北海道大学）の「地域観光による遺産マネージメン



総合討議の様子

ト」というラインアップでした。

二日目は、参加各国の実情と課題についての事例報告と意見交換です。多くの国々では、地域連携での経験と蓄積が少ないようで、文化遺産の保存に地域社会はどのように関わればいいのかを模索している実情がよく分かりました。

ならば是非とも現地を訪れて、日本の実例に直に触れて欲しいものです。今井町（奈良県橿原市）、奈良井・木曾平沢（長野県塩尻市）の重要伝統的建造物群保存地区へ、三日間かけて出かけました。

訪問先で、保存整備された町並みの様子を見ることはもちろんですが、実際に保存の取り組みに携わってこられた、行政と住民の皆さんと一緒に、膝詰めで双方のお話をじっくり伺うことができたのは、貴重な経験でした。

参加者の皆さん

シーソワット・チャンテウィ（カンボジア）
 蔣叶琴（ジャン・イーチン）（中国）
 シーサワット・ニラツチャイ（ラオス）
 スレッシュ・シエスタ（ネパール）
 ペロニカ・タド（フィリピン）
 スメタ・マント（スリランカ）
 ヴー・ティ・ハー・ガン（ベトナム）
 リチャード・シン（バヌアツ）
 セトキ・トウテシ（フィジー）
 陸 偉（ルー・ウェー）（ユネスコ・アジア太平洋
 洋地区世界遺産研修研究センター）
 下間久美子（文化庁）
 清水重敦（京都工芸繊維大学）
 西山徳明（北海道大学）
 西村 康（ACCUN奈良事務所）



参加者の皆さん

海外の皆さんからはよく、「どのようにしたら日本のように、地域との良好な関係を築くことができるのか？何か秘訣があるなら、教えて欲しい」と問われてきました。日本でも順風満帆だったわけではありません。困難を克服してきた歩みや、未だ解決できない悩みなど、多くのことを知ることができました。



蘇州での専門家会議 / 参加者の皆さん

UNESCOバンコク事務所 文化遺産専門家会議

(中国・南京)

2018年11月3～4日

WHITRAP 文化遺産専門家会議

(中国・蘇州)

2018年11月5～8日

ACCU奈良事務所は、1999年の開設以来、国際機関と連携しながら様々な研修事業を展開しています。とりわけ、ユネスコの諮問機関であるイクロム(文化財保存修復研究国際センター)との関係は深く、約20年にわたり、共同して研修事業を行ってきました。イクロムとの長年の連携で作り上げた研修プログラムには定評があり、毎年、多くの応募が寄せられます。

これまでの研修参加者は、37カ国から558名にのびます。最近では、当該国の文化遺産保護で主導的な役割を担って活躍する方々も増えてきました。20年の蓄積を感じているところです。

ただ、アジア・太平洋地域では、こうした文化遺産保護のための研修が、長く継続している事例は少ないようです。そこで今回、ACCUが持つ情報やノウハウを紹介して欲しいとの要請で、2つの国際会議に参加しました。

ユネスコ・バンコク事務所主催の文化遺産専門家会議(中国・南京)

この会議には、文化遺産の保護・管理に関するカリキュラムをもつアジア・太平洋諸国の大学の関係者や、専門研修を実施している国際機関の担当者など約50名が参加しました。①専門家養成のために必要な能力とは何か、②既存の教育課程や国際研修に求められているものは何か、③それにどのように応えるべきか、が熱く議論されました。ACCUの研修は、実習中心で実務的だとの

評価を受けるとともに、新テーマの研修開発や、将来の連携・協力への期待なども寄せられました。

WHITRAP主催の文化遺産専門家会議(中国・蘇州)

WHITRAP(ユネスコアジア太平洋地域世界遺産研修研究所 / 通称上海センター)は、ユネスコが賛助する機関で、ユネスコと協力して国際研修事業などを実施しています。この会議にはユネスコ地域事務所や政府機関の担当者など27名が参加して、文化遺産保護に関わる専門家たちの連携をいかに構築するかをテーマに、活発に意見が交わされました。ACCUも、事業概要や研修生とのネットワーク構築と維持について、具体的な事例紹介をしました。



南京での専門家会議 / 討議の様子

世界遺産 教室

高校生969名が受講しました。

県内の高校生を対象に、私たちが世界遺産教室をはじめたのは2005年のこと。当初は、感触を伺いながら年間4校開催でのスタートでしたが、今や人気の定番出前授業にまで成長し、受講生は7000名を超えました。

この間、講師として教室を支えてくださったのは、フリーアナウンサーの久保美智代さんと、通訳の小野以秩子さん。お二人とも、毎年いくつもの世界遺産を巡ってきた、筋金入りの世界遺産オタクです。久保さんに至っては、その数400か所以上といますから、ユネスコの専門家もビックリです。

さて、この教室では、たくさんの映像や、「おもしろゼミナール」と銘打ったクイズ形式の授業などを通じて、世界遺産の意義を、楽しく学びます。

昨年は10校で開催しましたが、ここ数年、各校が求める授業スタイルが、多様になってきていることが印象的です。



稲葉信子さんの講演の様子

文化遺産 国際セミナー

2018年12月2日に、奈良市ならまちセンターで、「世界遺産「古都奈良の文化財」を考える」をテーマに開催し、200名の皆さんが参加しました。



セミナー開催案内のチラシ

1998年の12月2日、京都で開催中の第22回ユネスコ世界遺産委員会で、「古都奈良の文化財」の世界遺産登録が決まりました。それから20年の節目の記念に、あらためて奈良の世界遺産について考えてみたいと思いい立ち、このセミナーを開催しました。

冒頭、元興寺住職の辻村泰善さんが、登録20年を振り返ってくださいました。この間、周囲の様子が大きく変わったのは元興寺でしょう。「ならまち」と呼ばれるこの地域の真ん中でお暮らしの住職は、洒落たカフェや土産物店が増え、賑やかになる一方で、青果店や銭湯など生活に密着した店舗が店仕舞いしてきた様子も語られました。

続いて、奈良市教育委員会の山口勇さんが、世界遺産としての古都奈良の価値について解説くださいました。8世紀の古代都城に直接関連する寺社の木

造建造物群と、宮都の考古遺跡とが一体で残っている例は、世界でも奈良以外にはないとのこと。価値の高さをあらためて知らされた思いです。

世界遺産の意義と、登録をめぐるこの20年の国内外の動向をお話しくださったのは、筑波大学の稲葉信子さんです。稲葉さんは、世界遺産を、地球というひとつの自然と人類70億人の歴史を写す、壮大なジグソーパズルに喩えます。これまでにない新しいコマが見つかる限り、パズルは完成しないとも仰います。私たちは次に何を、パズルのコマにすればよいのでしょうか。

プログラム後半は、お三方の座談会です。新たなコマについても、話題になりました。今ならば、古都奈良も、法隆寺や飛鳥・藤原などと合わせて一緒に、またひと味ちがったストーリーのコマにできるかも知れません。



青翔高校(小野以秩子さん)



橿原高校(久保美智代さん)

少人数の対話型スタイルがあれば、大入りの劇場公演のようなスタイルもあり、さまざまです。この出前授業をいかに活用できるかを、各校の皆さんが模索しだした表れかも知れません。より良い教室に育てたいものです。

開催校
(奈良県立) 奈良朱雀高校・青翔高校・西の京高校・法隆寺国際高校・橿原高校・香芝高校・畝傍高校・五條高校・高田高校
(奈良市立) 一条高校

セブセブ(Sevusevu)の儀式とカヴァ(Kava)



表紙の写真：フィジー ワークショップ / 開講式での「セブセブ」の様子



フィジーでは、今も伝統文化を大切にしています。訪問客が村に入る際には、セブセブという歓迎の儀式を行います。はじめて村を訪れる訪問客は、カヴァという植物の根の部分を持参して、口上を述べて村の長に献上します。

村民が歓迎の意を伝えると、「カヴァの飲み会」が始まります。カヴァ(英名kava)は、フィジー語ではヤンゴーナ(yangona)と呼ばれる、コショウ科の灌木です。その根の部分乾燥させたもの、またはそれを砕いて粉末にしたものを、タノアという木製容器の中で水に浸して、揉み出した絞り汁が、座の一同に振る舞われます。

目付役の進行で、ひとりがカヴァの汁を作り、もうひとりがココナッツ殻の椀に汁を汲み、客に差し出します。偉い人から飲むのが決まりのようで、順番は目付役が指示します。

カヴァは、堅苦しい儀式だけでなく、冠婚葬祭はじめ普段にも広く飲まれています。まさに国民的愛飲料なのです。フィジーの人たちは、飲み始めると、雑談しながら延々と飲み続けます。私たちが5~6杯は頂戴したでしょうか。ごちそうさまでした。

ところで、ACCUワークショップの期間中に、大洋州の連邦諸国を歴訪中の英国ヘンリー王子とメーガン妃のご夫妻が、ちょうどフィジーを訪問されました。セブセブとカヴァで歓迎を受けたこと、言うまでもありません。

翌朝の一面は「王子カヴァ初体験」でした。



上：自生のカヴァ
中：スバの市場 / 1階は青果物の売り場
2階にカヴァ専門店が多数入居
下：カヴァの根 / 袋入りは粉末のもの



公益財団法人
ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所

Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113 奈良市法蓮町 757(奈良県奈良総合庁舎1階)

TEL 0742-20-5001
FAX 0742-20-5701
URL <http://www.nara.accu.or.jp>
E-mail nara@accu.or.jp

交通アクセス

- 近鉄奈良駅から
 - 徒歩約20分
 - バス13番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ
- JR 奈良駅から
 - 徒歩約20分
 - バス西口5番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ